香川県農業試験場研究報告　第 31 号(1979 年 11 月)　 1-9

夏キュウリの側枝発生不良に関する研究

西谷国宏・山内正幸

夏キュウリの近成山東を接木苗で定植すると,側枝の発生が極めて不良となり主枝に雌花が節成状に着生することについて原因の究明を行った。

１．主枝の雌花着生を減少さすため育苗時にジベレリン処理を行った結果,処理濃度が高く,処理回数が多い場合は,若干側枝数が増加したが,収量増には結びつかなかった。

２．主枝に着生した第 1 雌花を 20 節位頃まで摘花すると,側枝の発生が増加し収量も増加した。

３．夜間の最低育苗温度を 18℃程度の高温育苗をすると近成山東のみならずその他の夏キュウリ品種でも側枝数が増加し,収量も増加した。

４．近成山東は定植期を早めて定植後低温に曝すと主枝の雌花着生率が高くなり側枝の発生が極めて不良となった。短形夏キュウリでも、近成山東に類似した雌花率の高い品種を早期定植し,低温に曝すと側枝の発生が不良となることが推察された。

５．早期定植した近成山東を台木の種類によって側枝の出方を調査した結果,どの台木も側枝の発生は不良であったが,№一 8 台が若干良好であった。ときわ光 3 号 A 型などは定植期の早晩にかかわらず側枝はよく発生した。台木の種類では,強力新和台が若干側枝数が減少したがその他の台木ではいずれも側枝の発生が良好であった。